

巻頭言

患者の立場

石垣 武男

8月のお盆期間を利用して「痔」の手術のために専門病院へ2週間入院した。以前、近視・乱視・白内障の治療のための人工レンズ移植で1週間入院した経験があるだけである。本格的に「メスを入れられる」のは初めてである。病室へ案内された瞬間から完全に「患者」になってしまった。そうすると、患者の立場、普通の人として病院内の状況を観察できる。

手術は腰椎麻酔なので意識はある。手術台にはらばいになって処置を受ける。麻酔が効いてから手術にはいるわけであるが、自分では観察できないので、何か押しているような感覚がするだけである。最初は40分くらいということであったが、壁の時計を見ると大分延長している。執刀医と助手が手術しながら話す声が聞こえる。「これで、いいな」「まあ、こんなものでしょう」「このへんでいいかな?」「いいんじゃないですか」などという会話である。患者として必死に腹ばいになっている私としては奇異な会話である。なんだか、いいかげんな感じにも受け止められる。しかし、医師としての自分を振り返るとこういう会話は日常茶飯事のような気がする。二人ペアでの時である。血管造影検査の最中には「この血管でいいかな」「多分そうですね」ということで造影剤を注入する。放射線治療を開始する際、患者さんを照射ベッドに寝かせてから「照射野の上限はこのへんでしょうか」「まあ、そのへんだらう」。いずれも患者さんはこういう類の会話を聞いているわけである。しかも、普段より格段と神経を張り詰めて。こんないいかげんな判断でいいのか?と疑問に思ったり、不安を感じるであろう。

医療スタッフ側はあいまいな表現で会話をしている、実際にはあいまいな判断をしたり、いいかげんな態度で臨んでいるわけでは決してない。しかし、対話の無い、一方的に聞こえてくる言葉というのは、その表現があいまいなほど、受け止める側には不安感が増し、不信感に変わるかもしれない。感覚的にはわかっている、患者として体験すると身にしみてわかる。

常に相手の立場に立って考えるという姿勢は大切なことである。

(名古屋大学医学部教授・放射線医学教室)